

# 生 *Seikatsu Bunkashi* 史

## 生活文化

<史料館だより>

### 目 次

- ◇深江物語(2) — 昭和20年代の稲荷筋を歩く — ..... 森口健一 2
- ◇展示品との対話 (一八)
  - 大正三年の電話番号簿 ..... 藤川祐作 10
- ◇深江の町を知る「関西あそ歩」実施協力 ..... 深江 塾 12
- ◇「踊り松」あれこれ ..... 杉浦昭典 13
- ◇史料館におけるIT施策 ..... 高田祐一 14
  - ～webサイトの更改とOA環境の整備～
- ◇神戸深江生活文化史料館
  - 創立三〇周年記念のつどい ..... 道谷 卓 16
- ◇電子書籍「写真でたどるふるさと深江」発刊 ..... 大国正美・水口千里・高田祐一 17
- ◇トライやる・ウィークと史料館 ..... 水口千里 18
  - 本庄中学校の生徒を受け入れて —
- ◇本庄小学校歴史写真展の開催 ..... 深江 塾 19
- ◇史料館日誌抄 ..... 道谷 卓 20

2012. 3.31  
NO.40

「神戸高等商船学校機関科座学修了記念誌」に掲載された昭和5年の阪神深江駅。踏切西側に木造の駅舎、東側には踏切番の小屋があった。商店は駅舎の際まで迫っていて、稲荷筋も道幅が狭かった。



神戸深江生活文化史料館

## 深江物語(2)

## 昭和20年代の稲荷筋を歩く

深江 森 口 健 一

## 深江の北と稲荷筋

「昔の深江の北は、田んぼと畑ばかりだった」と古老は言います。この昔とは、昭和三十一年『経済白書』が「もはや戦後ではない」と宣言した頃までのことで、南北に分ける区切りは、阪神電車軌道です。

この頃までの「深江のキタ」でめばしい建物といえば稲荷筋の信親寮、三徳金属の工場、札幌通の帝国製氷工場(写真1)くらいでした。稲荷筋、札幌通、栄通に沿って住宅が点在する程度で、夏になるとあちこちから



写真1 昭和30年ごろの帝国製氷工場  
(長瀬龍作氏提供)

カエルの合唱が聞こえました。昭和三十年代に入ると「深江のキタ」に工場や集合住宅が相次いで建てられ、ここから本庄小学校に通う転校生が急増しました。この深江を「キタ」と「ミナミ」に分ける言い方は、単に地理的にキタやミナミ

といっているだけではありません。町の成り立ちや人の気質の違いまで幅広い意味が込められています。「深江のミナミ」という場合には、深江村としての伝統やしきたりあるいは人のつながりを村のままに色濃く残している地域や人を意味するのです。

北地区は、昭和三十年初頭を境にして急激に住宅や人口が増加して、いわゆる都市化した町です。北地区が都市化するにつれて、深江駅界隈も特に駅より北の稲荷筋に沿って現在の姿に近いものになりました。稲荷筋にはそれまでも駅から北に店舗も並んでいましたが、昭和二十年代の深江の中心は、深江駅の南にある大日神社の西の「銀座通り」でした。

今回は昭和二十年代後半の駅北の稲荷筋界隈を、深江塾のメンバーで回想して、追加で取材を重ね文章にまとめ、深江塾全員で内容の点検をしました(図1)。

## 稲荷筋の商店街

駅の改札を出てすぐ北側に「佐原建設」。この店舗は建材、お茶、風月堂の菓子と扱う商品を変えながら平成二十年代の駅前再開発事業開始まで永らく営業していました。その北に「フタバカメラ店」。この頃、庶民にとってカメラは高嶺の花です。この店はカメラという商品を売るよりも「現像・焼き増し」といった技術を売る店でした。

細い路地を挟んだ北側に「松本新聞舗」。新聞舗の北に「建部表具」「木田菓子店」「横幕荒物店」があり、「横幕荒物店」は後に「大植薬局」となります。この店は、元は駅の南、深江銀座通りに面してあったものが移転したものです。当時、深江駅南にはほかに大日神社前に「ダルマ薬局」がありました。大植薬局はその後廃業し、現在大植ビルと姿を変えています。その北に「上増呉服店」。大正時代には浜街道沿いにありましたがその後移転したものです。

駅改札を北に出て稲荷筋を東に渡った正面に「神戸銀行」。北に「今北洋品店」・「パーマ店（美容院）」・「上田寿司店」と並んでいます。パーマ店は文殊四郎平三郎さんが経営。文殊四郎とちよつと変わった苗字で、昔刀鍛冶だったと伝えられています。平三郎さんが表札の注文をしたところ「文殊 四郎」と「平 三郎」の二つの表札が出来上がってきたというエピソードもあります。昭和三十一年代はパーマ店が少なく、年末はとても混雑したといえます。昭和三十寿司店の道を挟んで筋に面した北角に喫茶「ドン」。この喫茶店



図1 昭和20年代後半ごろの稲荷筋界隈（山口咲子さんが作成したものを深江塾のメンバーで修正）

「パリキ」と呼ぶ、それを使う運送業者も俗に「パリキ」と呼んだようです。昭和二十九年に開設された稲荷市場は、難波氏の「御影などに負けない深江の繁華街の拠点にしたい」という構想から生まれたと伝わっています。この市場は後に「深

は「深江の若い衆」の溜り場でした。もちろん若い衆だけが客ではありませんが、男性の情報交換の場で、ご婦人方がゆつくりと会話を楽しむような純喫茶の雰囲気はなかったと、当時の若い衆は言います。また当時喫茶店は少なく、神戸高等商船学校の学生がよく立ち寄っていたといえます。

「喫茶ドン」から北に行き今の御影鳴尾線と稲荷筋の交差点には東角に「難波たばこ店」、割烹寿司の「伊佐武」が並んでいました。西角には現在ではイイダビルとなっている所に「飯田歯科医院」がありました。

この交差点から現在の三徳工場までの間の西側は、昭和二十九年から三十年ははじめにかけて「稲荷市場」というショッピングセンターになります。それ以前は敷地の大半が畑でイチジクが栽培されていました（写真2）。イチジク畑のほか馬や牛がその敷地で飼われていました。運送会社を経営する難波辰蔵氏が、物品運搬の労力として飼っていたのです。馬に引かせる荷車を当時は「パリキ」と呼び、それを使う運送業者も俗に「パリキ」と呼んだようです。



写真2 稲荷市場になる場所は戦前は数少ない店舗があるだけだった（稲荷筋・飯田歯科医院前）

江ショッピングセンター」となり、昭和四十三年にオープンした「コープ深江店」とともに深江の集客拠点になります。この市場が出来るまでは深江には、駅前を中心に自然発生的ないわゆる「パバママストア」が並んでいました。商店街形成の意図を持って出来たショッピングゾーンではありませんでした。これに対し、稲荷市場は「まちづくり計画・構想」のもとにできた「ショッピングセンター」です。

しかし一挙に市場が出来たわけではありません。初めは稲荷筋西側に沿って店舗ができました。多田電気店、太平薬局、オーバ時計店、現在の福田果物店となる西尾果物店、アポロ喫茶店などです。さらに今の福田果物店辺りを東の入口として西に伸びて、その西の突き当たりは南北に店が並ぶ配置を主とする商店街となりました。

昭和三十年に住宅公団が発足しました。この頃から深江の北には続々と公営住宅が建設され、「田んぼと畑」が住宅地に変わっていきました。これらの住民の多くは電車通勤のサラリーマンです。元の「田んぼ畑」の地域から深江駅に向って人の流れが出来ました。稲荷市場をはじめ稲荷筋はこれらの人の流れ、人口の増加に対応する深江の繁華街へと成長していきました。

**深江の金融機関**

戦前から深江駅近辺に二つの金融機関がありました。深江郵便局と神戸銀行深江支店です。

神戸銀行は神戸のほか県内の主要都市の地方銀行を合併して昭和十二年に出来た都市銀行で、昭和四十八年には関東の太陽銀行と合併して太陽神戸銀行となりました。余談ながら山崎豊子さんのベストセラーの一つであり、テレビドラマや映画にもなった「華麗なる一族」のモデルは、「神戸銀行」でした。平成二年、財閥系の三井銀行と合併して太陽神戸三井銀行となり、さくら銀行と名称を変

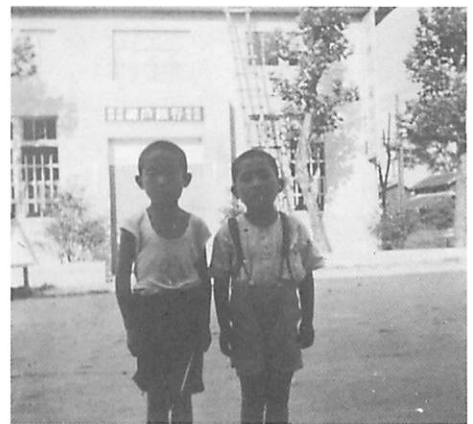


写真3 戦前、新築間もないころの神戸銀行深江支店（佐原浩平氏提供、山口咲子さん収集）

した。深江に軍需工場が出来るとして、にぎやかになってきたため、銀行が拠点を移したのです。しかし木造の建物で普通の民家と区別が付かなかったとい

います。昭和十八年には深江駅北東の稲荷筋東沿いに移転しました（写真3）。移転が幸いし昭和十八年に新築された建物は空襲被害も免れ、戦後

も改築を重ねながら利用され続けましたが（写真4）、昭和四十五年、老朽化が激しくなり、建て替えられました。神戸銀行が駅前に来れたことは

え、さらに、平成十三年住友銀行との合併によって三井住友銀行となりました。神戸銀行深江支店は、元々は青木にありましたが、昭和十五年に西国浜街道に面して、大目神社のすぐ東側に移転してきま



写真4 昭和45年ごろの神戸銀行（『深交くらぶ30年史』から）



写真5 「昭和51年ごろの深江郵便局  
（『深交くらぶ30年史』から）」

稲荷筋が深江のメイン

ストリートとしての意

味を大きくしたといえ

ましよう。稲荷筋沿

いにショッピングセン

ターがあり、人口が増

えて娯楽施設ができた

ことにより、必然的に

金融機関としての神戸

銀行深江支店は深江の

集金機関として大きな

役割を果たしました。

しかし銀行は「バブル

経済」崩壊後の不良債

権問題などから金融再

編成の波をかぶりまし。銀行は整理統合を進めて「三井住友銀行深江支店」も平成十八年三月には芦屋支店に統合されてしまいました。

一方、郵便局は大正八年九月、本庄村深江六九一番地に開局しました。五代目局長内海六郎氏の記録「深江郵便局六十余年の歴史」によれば、現在の大日公園の北側、深江本町三丁目六番地、浜街道と札幌通交差点の北西で、初代局長は岡田保太郎さんでした。大正十二年十二月には、阪口正一局長に引継ぎ、本庄村深江七二二番地に移転。当初の位置よりやや西、浜街道に面した南側でした。さらに同十二年四月には藤井恵三局長が三代目局長になり、本庄村深江六四一番地、深江駅南側の稲荷筋に面した所に移転しましたが、昭和二十年八月五日の空襲で焼失、昭和二十二年三月に現在地（当時

は本庄村深江七五五番地）に新築移転しました（写真5）。

#### 地域に開かれた社員寮・信親寮

戦前から昭和四十年頃まで、現在の「コープ深江店」の場所に木造二階建ての建物がありました。本庄・深江の海岸にある新明和工業所有の建物で、その名を「信親寮」といいます。およそ二千坪の敷地にある集合住宅です。戦前の昭和十六年に建築されて、当時は新明和工業の前身である川西航空機という海軍の航空機を製作していた企業の社宅でした。社宅とは言っても入居者のほとんどは工場で働く女子工員でした。

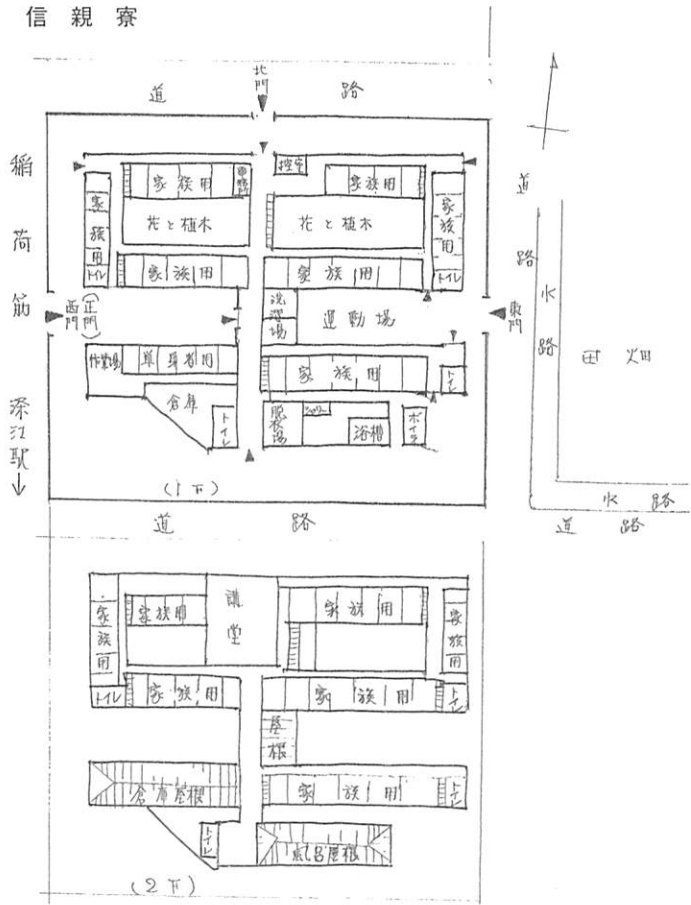
この建物は昭和二十年の幾度かの空襲からの被災を免れました。大規模な集合住宅としてのマンションが深江にも建ち始めたのは昭和四十年代後半以降で、この建物の周りは田や畑しかなかったこともあり、目立つ建物でした。中央に広場をはさんで概ね南と北に二棟からなっていて、約八十室がありました。元は女子寮でしたので一室十二畳ほどの広さしかありません。

川西航空機は敗戦と共に工場としての役目が果たせず従業員もほとんどいなくなり、戦後は、社員でない深江の戦災被害者や住宅困窮者のため賃貸住宅として提供されました。しかし昭和二十五年六月に始まった朝鮮戦争はこの建物にも変化をもたらしました。戦闘がはげしくなるにつれて、新明和工業が米軍からジェット戦闘機F86の増槽燃料タンクを製作することになったのです。当然従業員も増え、寮は新明和の社宅として本来の用途に供されることになりました。

居住者が記憶を頼りに作成した概略平面図で、昭和三十年頃の信親寮を見てみましょう（図2）。東西に長い木造二階建て二棟の建物は、中央の渡り廊下で繋がっています。敷地の門は稲荷筋に面した西門、敷地の北の東西の道に面した北門、東の南北に面した東門

の三つの門がありました。稲荷筋に面した西門が正門といわれていますが、管理事務所は北棟中央の北門を入ったところです。社宅として再び活用されたときに管理人が置かれました。沖繩出身の方で家族ともども住み込みでした。洗濯場、浴場、トイレ、水道は全て共同でした。練炭を使って炊事や暖を取りました。

北棟はさらに南北に分かれて、中廊下に取り囲まれた家族用の部屋が並んでいました。家族用北棟の一階北玄関を入った右手が管理入室・事務所です。玄関ホールをはさんで事務所前に控え室がありました。控え室は、寮全体のための共同の応接室でもありました。



1. トイレ・風呂・洗濯場は共同使用
2. ガス・電気は各家庭に引込済

図2 昭和30年ごろの信親寮  
(昭和29年入寮の長瀬龍作氏原図、森口健一作図)

トイレがありました。廊下を挟んで左手、東側は家族用住宅がありその南に接して別棟で浴場があります。浴場は西側の入り口から順に脱衣場、シャワー室、浴槽と並んでいます。湯は屋外のボイラー室から供給されていました。南東の西半分は一階建てでした。

北棟は構造的には総二階建てですが、北玄関上の二階部分に住戸四戸分相当の五十畳くらいの広さの講堂があり、卓球台もありました。時々この住民が持つ米国製の小型テレビで、近所の子どもに時間を区切って、NHKのマリオネットという子ども向け番組を見せてくれました。まだ街頭テレビもないころです。また昭和二十年

北玄関を入って中央の渡り廊下を南に直進すれば左手に共同洗濯場。洗濯場の南、稲荷筋側に単身者用住宅、作業場、倉庫、



写真6 昭和30年代の信親寮でのクリスマス会  
(長瀬龍作氏提供)

代の後半から三十年代はじめのクリスマス会が珍しかった頃、ここでは音楽会、学芸会が時々開催され、クリスマスプレゼントが配られました(写真6)。

夏休みには、新明和工業が中央広場を利用して社員向けの映画会を開催し、地域の人たちに開放されることがありました。今で言えば企業の地域貢献活動といえましょう。いかにも米国と密接な関係がある技術や製品の企業ゆえの「文化」といえるかもしれません。

昭和四十年頃、寮の敷地の西半分は神戸灘生協の店舗用地、東半分はマンション用地として処分されました。

**先端技術を誇る三徳金属工場**

稲荷市場と道を挟んで北側に「三徳」の工場があります(図3)。深江の人は単に「サントク」と呼んでいます。昭和十二年にこの地に三徳金属株式会社として創立されました。昭和十三年に三徳工業となりましたが、戦後の昭和二十四年、三徳特殊金属として再出発、同年社名を三徳金属工業と改称、さらに平成十一年に社名変更で現在は株式会社三徳となっています。戦前からあった川西航空機同様、三徳金属工業も「軍需」に関連する企業でした。

昭和十二年、稲荷市場に隣接した西側に第一工場、同十四年、稲



図3 昭和20年代後半ごろの深江北町

荷市場の北側に道路を挟んで第二工場、さらに同十八年、北側に第三工場と三つの工場ができました。昭和二十年八月の空襲で第二、第三工場は被災しましたが、第一工場の電気炉、第三工場の発電機は無傷で残りました。当時の深江工場の従業員は四〇〇人でしたが、戦後軍需産業がなくなって、昭和二十四年の再出発の時は社員はわずか三〇人でした。第一工場は今では日商岩井が分譲したマンションに変わっています。

三徳がどんな会社なのか、地域の人はあまり知りません。その理由は、この会社・工場の主力製品が一般消費者の目に触れたり話題になることの少ない「レアメタル」あるいは「レアアース」という産業素材を扱うことによるものと思われれます。これらは戦車の鋼板や軍艦の大砲などの製作と品質向上に欠かせない金属です。この「レア」は「めずらしい」「少ない」という意味を持った「希」という漢字が当てられます。つい最近では中国がその輸出制限を行って世界的な貿易問題にもなりました。三徳金属という会社は「希土類」あるいは「希金属(貴金属ではない)」を取り扱う技術を持つた企業です。

戦前には従業員のために札幌通、現在の「青い鳥幼稚園」辺りに「三徳寮」という社員寮までありました。当時の深江工場の従業員は四〇〇人のうち半数が寮に入り、地方から出てきた若い人達を育てるための教育施設「三徳深江青年学校」を用意し中等教育を行いました。そこからはさらに大学に進学する卒業生もいたといえます。しかし昭和二十年五月の空襲の被害を受け寮は全壊、敗戦と共に軍需がなく工場そのものも操業停止状態になってしまいました。稲荷筋にあった第一工場や第二工場では、残留資材のアルミニウムを利用し、ナベや釜を作り、高橋川沿いに鉄管を設置して、海から海水を工場に引き込んで塩を作りました。

しかし特殊な技術を持つ強みは健在でした。レアアース、レアメタルを扱う特殊な技術を、ライターの着火石の製造に生かす道を編み出したのです。マッチすら貴重な商品であった戦後の時代にライターはさらに貴重で、ライターの着火石はまさに希石であり貴石であったのです。三徳金属のライター石は、売れに売れてその売上金を「石油缶に入れてその重量を計って数えた」という信じられない話が伝わっています。

三徳金属という企業はその技術の優秀さから、敗戦の痛手から立ち直り現在も広い敷地と共に稲荷筋に沿ってあります。

ただ、深江の繁華街あるいはメインストリートとして、稲荷筋のあり方や発展を考えたとき大きな工場敷地がここにあることは賛否が分かれるでしょう。昭和四十年代以前は、煙突から緑の煙を吐き出し、臭いにおいがして近所から苦情があったこともありました。深江駅を出て稲荷筋を北に向かうとき、繁華な風情はこの工場を境に途切れます。稲荷筋を深江のメインストリートとして発展拡張を思案するのも「深江のまちづくり」としては必要な時期ではないかと筆者は思います。

#### 戦後娯楽の花形・稲荷劇場

稲荷市場が開設された昭和二十九年の頃に映画館の稲荷劇場が出来ました。深江唯一の映画館です。相前後して近隣に開設された映画館として、青木に大和劇場、森に銀映、芦屋に芦屋会館がありました。稲荷劇場は邦画で東映映画が主力です。

昭和二十年代から三十年代初めにかけては、邦画の全盛期でした。まだテレビもなく、映画を見に行くことは人々の大きな娯楽の一つでした。

稲荷劇場では時代劇が多く上映されてきました。当時の封切り映画館の大人の入場料は一〇〇円程度でした。当時の喫茶店でのコー

ヒー一杯が五〇円前後、新聞代が一月三三〇円の時代です。時代劇といえば「アラカンの鞍馬天狗」が一番の人気映画でしょう。「アラカン」とは嵐寛十郎で後に映画明治天皇シリーズでの明治天皇がまり役となります。さらに時代劇のヒット作といえば中村錦之助、東千代介、高千穂ひづるの「紅孔雀」です。そのポスターには「笛吹童子の東映がよい子に贈る」と書かれています。

昭和二十年代から三十年代の子どもの遊びで「チャンバラっこ」がブームになりました。「紅孔雀」や「笛吹童子」あるいは「鞍馬天狗」を見て自分たちも映画の主人公になりきって、当時深江のあちこちにあった広っぱでチャンバラっこをして遊んだのです。

稲荷劇場では、松竹映画のバンジュン（伴淳三郎）、アチャコ主演の「二等兵物語」、東宝で黒澤明監督の「七人の侍」、新東宝・嵐寛十郎主演の「明治天皇と日露大戦争」なども上映されました。東映系映画劇場でありながら、他の映画会社の作品も上映していたのです。当時の映画館は「三本立て上映」が当たり前で、一度に三つの作品を見ることが出来たのです。

三本立てですから一つの配給会社の作品では間に合わず、近隣の映画館の芦屋会館、銀映などとフィルムを回しあっていたというのです。一つの映画が終わると別のフィルムを別の映画館に持って行き、代わりに違うフィルムを持ち帰るといわけです。そのために従業員は自転車ですれぞれの映画館に走るようになります。この仕事は深江の若い人のよいアルバイトになりました。

#### 若者レジャーの拠点・阪神スケート場

深江の娯楽施設で忘れてはならないのが阪神スケート場です。この施設は、稲荷筋ではなく札幌通に面してありました。現在の竹中工務店の社員寮と通りを挟んだ北側に、戦前からあった帝国製氷株





写真7 高松宮が来場されたスケート場（昭和23年）

式会社の付属・関連営業施設として開設されたと聞きます。当時、スケート場といえば神戸は新開地の聚楽館スケート場しかありませんでした。このため阪神スケート場がオープンしてからは電車に乗って若い人達を中心に多くの来場者がありました。昭和二十三年には高松宮が来場されました。当時の写真が残っています（写真7）。  
 どれほどの人気施設であったのかを語るエピソードがあります。スケートリンクに入場する「時間待ち」が三時間というのはざらでした。後にブームとなったボウリングも待ち時間が三時間、四時間という時もありましたが、スケートは待つ場所が冬の路上ですから大変です。待つ人の列はスケート場の札場通を越えて稲荷筋まで延びたといえます。

このスケート場は、リンクの有効利用のため、勤めや学校へ行く前の時間を利用してスケートを楽しむたい人のために早朝割引制度を実施しました。通常価格の半額以下で、昭和三十年前後ごろは、貸し靴込みで二時間で一〇〇円でした。電車に乗って早朝割引のために来場する事は困難を伴いますから、当然地元有利ということになります。この早朝割引は「ペンギンタイム」と呼ばれていました。なぜペンギンの名なのかその由来は不明ですが「明日、ペンギン

タイムいこか」が深江の若い人の合言葉になりました。

この阪神スケート場で猛練習に励み、後に全日本チャンピオンになり、世界に羽ばたいた選手に関学大の上野純子（現・平松純子）さんがいます。さらにこの上野純子選手のメイントレーナーとして指導にあたったのが当時深江在住で本庄小学校、中学校のPTA会長であった松葉徳三郎氏です。この松葉徳三郎氏は昭和三十年代に、プロ野球の南海ホークスが日本シリーズを制して日本一になったときの名トレーナーとして知られています。

◇

なお原稿化に先立って意見を交わした深江塾のメンバーは、筆者の森口氏のほか、飯田一雄、植田延生、大西令子、寺田喜多子、西土井敏、畠信也、藤本吉江、増田行雄、三枝照於、山口咲子、松下ヨシ子、津田雅敏の各氏と史料館の道谷副館長、水口研究員と史料館長です。また昭和二十九年に信親寮に入寮された長瀬龍作氏には当時の平面図作成や聞き取りでお世話になりました。田賀明男・多田正市・難波保隆・樋口隆・古池順一・松葉力の各氏にも協力いただきました。末筆ながら厚く感謝いたします（大国正美）。

## 〔参考文献〕

三徳金属工業株式会社『三徳金属工業株式会社50年史』二〇〇〇年

内海六郎「深江郵便局六十余年の歴史」『深交くらぶ30周年記念号』一九七六年

春木一夫「銀行ができた」右同

週刊朝日編『値段史年表』一九八八年

展示品との対話（一八）

大正三年の電話番号簿

史料館研究員 藤川 祐 作

史料館開設のきっかけの一つだった地元の深山家の史料の中に、大正三年（一九一四）十一月六日開通の「兵庫県特設電話番号簿追加表 芦屋郵便局 芦屋特設電話加入者名及番号」という表題の史料と、私製と思われる木製一枚物の「芦屋五五番」の電話番号札（縦二二マ、横八マ、厚さ一・二マ、写真1）が残されている。

この史料では、冒頭に「番外一番 公衆通話用」「六〇番 障碍試験用」「一〇〇番 電報託送及一般事務用」と特別枠の番号を掲げ、続いて一番から七〇番までを割り振っている。なぜか五〇番が欠番で、八番・一六番が同一番号で二台ずつ所有し、猿丸又左衛門が四本、大利平吉が三本の回線を引いていた。一般加入者は六三名七〇台ということになる。末尾には「三・一一 西部通信局印刷」とあって、開通直後の大正三年十一月印刷の電話表のようである。ただ『新修芦屋市史』や『芦屋市史年表』によれば当初の加入者は三二名とあり、大きく食い違う。三二名は当初の申込者数で、一般加入者はすぐに六三名になったのではないか。『市史』によれば、加入者は大正八年（二三二）、同十年三四七、昭和元年（一九二六）年八九七、同五年一〇七九と急激に増えていくのである。

加入電話の設置場所は江戸



写真1 深山家の「芦屋五五番」の

電話番号札

時代の旧村でみれば、芦屋五四台・打出一〇台・深江五台・三条一  
台だった。

深江の加入者は五名

深江での電話加入者は、以下の五人である。

- 二六番 中谷 庄兵衛 (永井浜) 羅紗商
- 二七番 福田 糸蔵 (永井浜)
- 三四番 柳 琢蔵 (永井浜) 医師
- 五五番 深山 廣三郎 (大日前) 医師
- 六一番 長谷川 清治 (東浜) 医師

三四番の柳琢蔵を除いて昭和十三年（二九三八）当時も継続的に居住していた（図1）。深山家は江戸時代からこの地で医業を営み、

貧困層からは謝礼を受け取らず診療をしたため、兵庫津から西宮までの広い範囲から患者が訪れた。廣三郎は本庄村村長も務め、杲氏——健二氏——鉄平氏とその後も代々深江で開業医を続けている。

これに対し、柳・長谷川は、明治末期にこの地に居を構えた大阪の病院長で、中でも柳は大阪医学校で助産婦教育を始



図1 昭和十三年ごろの深江浜付近（昭和十三年本庄尋常小学校卒業生が記憶を元に作成した地図）

めた著名な産科医だった。明治三十八年に開通した阪神電鉄は、沿線が健康に優れたことをアピールしようと、当時の大阪医学界のそうそうたる医師から寄稿を得て『市外居住のすゝめ』という講演集を明治四十一年に出版しているが、その際に執筆陣に加わった一四人のうちの二人である。『市外居住のすゝめ』で長谷川は「水の都から産業革命を経て黄塵の都と化した大阪を脱出し、空气清新（中略）、大気が清浄でオゾンに富み」などとこの地を高評しており、このころから大都市から阪神間に住居や別荘を持つ富裕層が急増した。『市外居住のすゝめ』の出版の中心人物だった大阪医学校（現・大阪大学医学部）の佐多愛彦校長も、現在の芦屋市山手町山手緑地、すなわち松風山荘に広大な別荘地を構えたことで知られ、大正三年の電話番号簿では三七番、「精道村ノ内芦屋村字杖東」居住と登場する。福田は、日の出証券を興した株式仲買人福田糸蔵ではないかと思われるが未確認である。

#### 加入者いろいろ

加入者のうち職業が判明するのは四〇人で、製造業六（石材石粉二、セメント・製塩・陶器・精米水車各一）、商業一（貿易商二、株式仲買二、ネクタイ・羅紗・材木・日用品・薬・医療機械・米穀雑貨各一）、料理仕出し旅館三、運送業一、サラリーマン九（会社員五・新聞社員二・銀行員・団体役員各一）、医師七、弁護士一、牧場一、養鶏一となっている。著名人として実業家で古美術収集家として知られる斎藤幾太、白洲次郎の父・文平が旧芦屋村に居住し電話加入していた。

この中にある五二番の矢島材木商店は、現在も営業を続ける数少ない店の一つである。創業は明治八年（一八七五）で現在は四代目になっている。当時の電話番号に二〇〇〇を加えたものが現在の自宅の電話番号になっている。三三番の打出焼陶器所もその後、二〇〇

〇〇を加えた二〇三三番が電話番号になったことが、昭和二十五年（一九五〇）十二月発行の『あしや（芦屋市弘報）』（現『広報あしや』の前身）に掲載されている広告で判明する。六四番の足立藤吉は、字毛賀金、日用品販売となっており、字名から茶屋之町の旧西国街道南沿いに阪神・淡路大震災まであった足立酒店と関係があると思われる。また大正期、松籟にあった芦屋遊園は写真が数枚知られているが、園内に料理屋として西川徳蔵経営の「魚喜」があったことがこの電話帳から明らかになった。

#### 電話番号札

史料館に展示している深山家の「芦屋五五番」の電話番号札は、表札が公道に面して掲げられているように表札と並べて掲げられていたであろう。番号は裏面にも書かれていて、当初番号が書かれていた面が長年の直射日光によって色あせ、読みづらくなって裏側に書いたよう、書体も異なっている。こうしたケースが芦屋市内でも見られ、門柱の上部に表札、下部に電話番号を埋め込んだケース（写真2）や戦前、通信省時代の金属製の電話番号札を勝手口に掲示していた事例もある（写真3）。

#### 芦屋郵便局の変遷

次に芦屋郵便局の変遷を見ておきたい。今日の郵便局は平田北町の国道四三号北側に位置しているが、元は阪神芦屋駅すぐ北側、すなわち芦屋警察署の斜め向かいにあった。現在は一階がスーパ―の入った雑居ビルになっている。昭和五年には新たに今日の大柘町に芦屋郵便局電話事務室を新築し、自動交換方式とした。この時期、今日の四桁番号が採用されたのだろう。



写真2

表札の下部に埋め込まれた電話番号（芦屋市内）

昭和八年には三・三世帯に一台の割りで普及した。昭和二十二年（一九四七）芦屋郵便局から独立して芦屋電話局となり、同二十五年に日本電信電話公社、同二十六年には加入者は人口一〇〇人当たり六・三八件に増え、全国一となった。

昭和六十年、民営化され日本電信電話株式会社（略称NTT）となった。芦屋郵便局電話事務

室は大槻町から宮川町の墨並芦屋高校東向かいを経て、現在地に移った。宮川町の建物は現在NTT兵庫支店芦屋別館無人機械棟となっている。大槻町の建物は上浪朗の設計によるもので、宮川町に移った後の建物はウエディングレストラン芦屋モノリスとして活用されている。

#### 〔参考文献〕

- 魚澄惣五郎『芦屋市史年表』芦屋市教育委員会、一九五三年  
 芦屋市史編集専門委員『新修芦屋市史』芦屋市、一九七一年  
 『芦屋のうつりかわり』芦屋市、一九六五年  
 『阪神間モダニズム展』実行委員会『阪神間モダニズム』淡交社、一九九七年  
 笠原一人「オランダに学ぶ近代建築と産業遺産の保存・活用」『歴史と神戸』二八九号、二〇一一年  
 辻川敦・大国正美編著『神戸／尼崎 海辺の歴史』神戸新聞総合出版センター、二〇一二年



写真3

勝手口に掲示していた通信省時代の金属製の電話番号札（芦屋市三条町）

## 深江の町を知る「関西あそ歩」実施協力

平成二十三年十月十六日（日）、二十二日（土）、三十日（日）の三日間、深江の町を知るために深江南地区を中心に歩くイベント「関西あそ歩深江コース」の案内を行った。

「関西あそ歩」は、阪神、阪急、南海の関西私鉄三社がその沿線各地の町を知ってもらうため、少人数に絞って実施するもので、ガイドブックには載っていない「町の文化や歴史」を訪ねる有料イベントである。協力団体にコミュニティーツーリズム推進協議会、神戸市、大阪市や神戸国際観光コンベンション協会などが連ねている。

七月に事務局から協力要請があり、史料館の提言もあって深江塾では当該イベントに積極的に協力することとした。八月下旬に主催者の要請により深江南地区の散策ポイントを担当者とともに実地見聞調査、プロのイラストライターが深江の絵地図を作成した。十月初旬に大阪市でイベント講師の研修会や打ち合わせに参加した。

コースは大日神社——本庄小学校——神戸大学——西国浜街道——正寿寺——浜エビス神社——太田酒造迎賓館——深江文化村の各ポイントとした。コース散策終了後は神戸深江生活文化史料館内で、地元「道灌」の酒を参加者に振る舞い喜ばれた。三日間の参加者は三十一名で、大阪市をはじめ遠方からの参加者も少なからずあった。

参加者から得たアンケートの結果は、①ガイドが熱心であり好感が持てた②深江文化村を実際に見ることが出来てよかった③機会があればまた参加したいなど好評だった。なお二年目も開催するかどうかは未定だが、継続を前提としている。

（深江塾 森口健一）

## 「踊り松」あれこれ

史料館名誉館長 杉浦昭典

神戸商船大学に教官として勤務した私は、昭和三十三年（一九五八）十二月から昭和六十三年四月まで大学の踊り松宿舎に居住しました。初めは今もなお二棟が並ぶ鉄筋住宅の一面に入りましたが、昭和四十年十二月に一戸建て新築の木造平屋の方へ移り、昭和六十三年四月まで住んでいました。その宿舎は私の退去後すぐに撤去されて今は駐車場になっています。そこが深江名所「踊り松」のあった場所だと知ったのは、宿舎対面にある養正館敷地北東隅の「踊り松の碑」建立が決まる少し前でした。私の住む宿舎の庭が、丁度「踊り松」のあった場所に当たるので石碑を建てさせて貰えないかという打診があったからです。あまりにも唐突な話なので考え余地はなく、あっさり断りました。深江本町四丁目の旧名は深江踊り松町です。元の字名、後の町名が「踊り松」に由来したことはいうまでもありません。

現在の神戸大学海事科学部東門から、踊り松宿舎と養正館の間を北へ延びて、国道四三号線と国道二号線とを結ぶ広い道路を旧称では商船学校線といました。昭和十二（一九三二）年三月、皇族である海軍軍令部総長伏見宮博恭王の神戸高等商船学校視察に合わせて整備されたからです。踊り松宿舎敷地と養正館敷地の北限を結ぶ線と商船学校線との交差点に、当時は神戸高等商船学校の正門があり、真つすぐ阪神国道につながる道路が造成されました。国道四三号線は、昔の神戸高等商船学校の校地を東西に横断して出来ています。「踊り松」は神戸高等商船学校構内の北東隅付近にありましたが、

川崎商船学校創立以前の大正初期、かなり老朽化しており、大正末期には既に一部が枯死していたといえます。商船学校の構内に取り込まれても地元から苦情の出なかったのはそのせいではなかったかと思えます。

大日靈神社境内、生活文化史料館の西側に祀られている稲荷洞は、「踊り松」の根元にあつて通称「踊り松稲荷」と呼ばれた洞を大正元（一九一三）年に移したものだそうです。その代わりというわけではありませんが、大正七年に私立川崎商船学校が設立された時、設置者の川崎家が讃岐の金刀比羅宮から勧請した分祀を学校の守護神として「踊り松」の根元に祀りました。大正九年、川崎商船学校は廃校になって官立神戸高等商船学校が創設されましたが、「踊り松」の金刀比羅宮はそのまま同校に引き継がれました。昭和十年には、それまで小さい洞だった社殿を拡大改築するとともに、新たに玉垣をめぐらして植樹し、相應の鳥居が建つことにより森厳の度を増したといえます。ただ「踊り松」は枯木同然で、辛うじてその形を止めるに過ぎなくなっていたということです。

昭和二十年四月、校地を海技専門学院（現在芦屋市にある海技大学校の前身）に譲った神戸高等商船学校は、東京、清水の両高等商船学校と合併し、静岡県清水市へ移って校名も国内唯一の「高等商船学校」に変わりました。同年五月と八月の空襲で海技専門学院の施設はほとんど壊滅に近い状態になりましたが「踊り松」と金刀比羅宮に直接の被害はありませんでした。しかし終戦後間もなく、進駐軍の通達により、国公立の学校内における神社の奉斎が禁止されましたので、金刀比羅宮のご神体は讃岐の本宮へ奉還され、社殿その他一切が撤去されました。この時点で「踊り松」も完全に枯れ果てて消滅し、整地後は全く跡形もなくなりました。

# 史料館におけるIT施策

～webサイトの更改とOA環境の整備～

史料館研究員 高田 祐一

史料館では、二〇一一年度に情報通信に関する施策（IT施策）をいくつか実施した。その取り組みを紹介するとともに今後の取るべき方向を考えた。なお過去に『生活文化史』（以下、史料館だより）の電子化を行い、当館Webサイトにて公開している。詳細は『史料館だより』三八号と三九号を参照されたい。

今回の施策効果の方向として外部向けと内部向けに分けられる。外部向けの効果とは、例えば一般利用者が史料館の情報を入手しやすくなったなどである。内部向けとは、館内の業務が効率化されたなどである。

## ■一、外部向け施策～情報発信力の強化～

一般利用者向けの情報発信を強化するために、Webサイトを更改した。当館のWebサイトは二〇〇六年七月に公開され、館の概



▲新Webサイト。枠線部にブログの見出しが表示される。

要、住所や刊行物の一覧などの基本的な情報を掲載し、広報の役割を担ってきた。しかし、昨今のインターネットでの情報発信の効果を鑑みてWebサイトのコンテンツの充実こそが情報発信力の強化に

つながると判断した。コンテンツを増やすためにWebサイトのデザインや構造の作り直しが必要であるため、更改した。そして増やしたコンテンツは主に二点である。

一点目はブログを開設した。目的はタイムリーに情報発信できることと、動的・制限性のある情報の切り離しである。タイムリーに情報発信できるのは誰でも簡単に更新できることである。一般のブログサービスを利用しているのでインターネット環境さえあれば携帯電話からでも手軽に更新できる。動的・制限性のある情報とは、閉館日の広報や展示替えなどの情報は、鮮度が決まっており役割が終えれば不要な情報である。本体のWebサイトに掲載すると、不要な情報を消す手間がその都度生じる。そのためWebサイトには更新頻度が低い静的なコンテンツを掲載し、更新頻度が高く鮮度が決まっているコンテンツをブログに掲載することによって場所を分離した。ただし、Webサイトを見ればブログの記事の見出しを確認できるようトップページに見出しを表示できるように連携した。

また「プレイバック史料館だより」という企画で記事をブログに掲載している。過去の史料館だよりの成果を還元するために、月に一度過去の報告を掲載している。ブログ来訪者に意識していなかった



▲ブログ「こちら神戸市東灘区神戸深江生活文化史料館」。展示替えなどを広報。

テーマに興味をもってもらうきっかけとして取り組んでいる。二点目は、出版物の目次の追加である。当館がどのような刊行物を発行しているか広報するために目次を追加した。『本庄村史』の

目次や史料編の史料の一覧を掲載した。

以上の施策により一定の効果が見られた。定量的な効果としてWebサイトの訪問数が増加した。更改前の二〇〇六年七月から二〇一一年四月二〇日で五〇二七訪問(ユーザーが開始したユニークセッションの数)あり、一日平均二・九訪問。新サイトでは二〇一一年四月二一日から二〇一二年二月一三日で二二六六訪問あり一日平均七・六訪問。ブログは二〇一一年二月六日から二〇一二年二月一三日で七四八九訪問で一日平均二〇・一訪問。Webサイトのみで約二・六倍になった。定性的な効果としてWebサイトを見て来館し、刊行物を求める人が出てきたことである。

### ■二、内部向け施策と災害への備え

当館内部向けに三つの施策を実施した。これらの施策により災害への備えと館内業務の効率化を目指した。

一つ目は館内PCの性能向上である。メモリを追加することによってライブサイクルを延長した。PCのライブサイクルはOSのサポート提供期間を考慮に入れながら検討する必要がある、当面はPCの新規購入よりハードを増強する方がコスト的に有利と判断した。増強によりPCの起動時間やソフトの処理が早くなり、執務環境が快適になった。

二つ目は、館内のOA環境のネットワーク化である。PC・プリンター・スキャナー・NASと複合機をネットワークで接続した。そのためいずれかの機器が故障しても他の機器にて代替可能となった。複合機とも接続したことにより、プリンターから出力したものを複合機でコピーするといった手間が省け、省力化につながった。またNASを導入したことにより電子ファイルの共有化と一元管理を図られるようになった。NASとはネットワークに接続して使用するストレージでRAID機能も備える。そのため同じネットワーク内ならNAS内のファイルをどのPCからもアクセスできる。さ

らにRAID機能によって、ハードディスクを冗長化することによって耐障害性の向上を実現できるため、機器自体のハード障害にも対応できる。このNASによってファイルを一元管理することにより、「車輪の再発明」のような資料作成は回避することができる。さらに従来では各PC内にそれぞれ写真などが保存されていたため、どれをバックアップして守っていくべきかが分からなかった。しかし一元管理することにより、バックアップ対象を明確にできるようになった。

三つ目は、データ保存プロセスの導入である。二〇一一年の東日本大震災のように建物自体が重大なダメージを受けたり、もしくは消失した場合、館内の電子データを守ることができない。そのため災害復旧のために電子データの遠隔地保管を始めた。機器自体の故障にはNASで対応し、災害の備えとして遠隔地保管で対応することによって電子データを確実に守る体制である。

### ■三、おわりに

二〇一一年度の施策によって史料館のIT環境の土台をソフト・ハード両面で整備できた。今後はこの土台に何を築いていくかが本質的な問題になろう。梅棹忠夫は博物館も情報産業とみなした。「発見された研究成果を編集して情報を発信する手段が、学術論文であり展示でもあるわけだから、民博は情報を発信する情報産業に他ならない」(『月刊みんぱく』二〇一一年三月号、国立民族学博物館)という。また大阪市立自然史博物館ではブログの情報がWebサイト、Twitter、外部のWebサイトへと二次利用されていく(佐久間大輔「博物館とインターネット―学術情報発信の現状を中心に」『博物館研究』第四六巻第一号、二〇一一年一月)。図書館界などでは、「情報食物連鎖」という現象まで見られる。今後は当館として何の情報を発信すべきか、何ができるのか、先行事例を参考にしながら検討していきたい。

## 神戸深江生活文化史料館

## 創立三〇周年記念のつどい

史料館副館長 道谷卓

神戸深江生活文化史料館は、一九八一年（昭和五十六）二月二十一日に、「神戸・深江会館生活文化史料室」として発足以来、二〇一一年（平成二十三）で三〇周年を迎えることになった。史料館は、もともと、『本庄村史』を編纂する過程で収集した資料を収蔵・保存・展示するために、深江財産区が設置したもので、発足二年後の一九八三年（昭和五十八）十月三十日には、収蔵資料の急増や来館者の増加のため、現在の館名となって拡張オープンした。こうした史料館の創立三〇周年を記念して、二〇一一年十二月十一日、深江会館三階において、記念のつどいが開催され、五〇名を越す多くの関係者が集まって、史料館三〇周年を祝った。

記念のつどいは、道谷卓副館長の司会により、一時半からスタート、最初に大國正美館長から、史料館三〇年の軌跡と今後の展望を中心に開会の挨拶をおこなひ、設置者である深江財産



▲講演する田辺初代館長とサポートする司会の道谷副館長

区管理会の志井保治会長が、出席者への謝辞を述べられた。続いて、来賓を代表して、神戸市東灘区の浜田有司副区長と国立民族学博物館の近藤雅樹教授のお二人から、お祝いの言葉を頂戴した。

こうした冒頭のセレモニーの後、初代館長の園田学園女子大学名誉教授・田辺真人先生が、「清盛からLPレコードまで——多彩な神戸の歴史と深江——」と題

して、記念講演を行った。史料館創設の頃である三〇年前は、生活文化史という概念がなかったこと、そして、この五〇年ほどの間の日本の劇的な変化に関して、集合住宅の間取りの変遷や死を迎える場所の変化などを例に具体的に話され、この五〇年は日本の歴史の変化の上でも特筆されるということを示され、史料館が果たしてきた役割を強調した。かつて、友の会の行事毎に田辺先生からいろいろな話を聞いてきた経験を持つ出席者も多く、久々に聞く田辺節に、参加者は感無量と言った感じであった。

講演後、懇親会の準備の時間を利用して、この度の創設三〇周年にちなみ、史料館ではこれまで集めた写真をもとに、大國館長と高田祐一研究員の力作である「写真でたどるふるさと深江」という電子ブックを発行、この利用方法が説明された。

この後、会は懇親会へと移り、最初に、第二代館長で神戸商船大



▲ますます磨きのかかる田辺節に聞き入る懐かしい顔ぶれ



学名誉教授の杉浦昭典名誉館長が乾杯の音頭をとり、出席者一同が、しばし和やかに歓談のひとつときを過ごした。会場のあちらこちらで、懐かしい話が聞かれ、その中には、震災の影響で解散した史料館の後援組織・友の会の会員番号一番の手島司氏の懐かしい顔もあった。歓談の途中、その友の会を支えてくれた、幹事の佐野末夫、寺岡一夫、門前喜康の三氏に登壇いただき、懐かしい友の会行事など当時の感想をお話いただいた。さらに、天田豊子、川口さつきの歴代事務局主事をはじめ、かつての史料館のメンバーにも登壇してもらい、一言ずつ近況報告をしてもらった。また、史料館では近時、地元の身近な歴史を見直そうと地域住民が自発的に立ち上げた組織「深江塾」と連携して活動を行っており、そのメンバーを代表し森口健一氏が史料館との連携を深めることで地域と史料館のつながりを強化し、史料館の活動を助けていきたいと話された。

最後に、深江で江戸時代から医師を続けてこられ、開設当初に史料館の収蔵資料の大部分を寄贈していただいた深山家の七代目当主で深江財産区管理会委員の深山鉄平氏から、閉会のあいさつをいただき、三〇周年のつどいは無事終了となった。



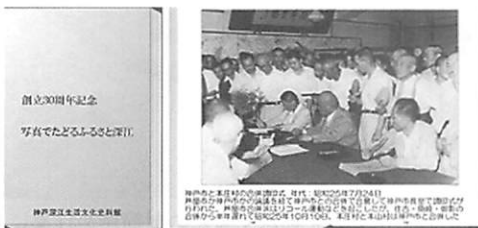
▲史料館と歩む新たなパートナー「深江塾」の面々

## 電子書籍「写真でたどるふるさと深江」の発刊

史料館館長 大國 正美  
史料館研究員 水口 千里  
同 高田 祐一

三〇周年記念事業として、明治から現代まで深江に関する写真約二〇〇枚を整理し、「写真でたどるふるさと深江」を制作した。電子版はUSB付きで七〇〇円。パソコンをお持ちでない方のために紙印刷版を四〇〇円で配布している。これまで『本庄村史』や『生活文化史』で公開したものの集大成だけでなく、地元「深江塾」のみなさんの協力で新出資料も収録することができた。章立ては、航空写真・海辺の景観・高橋川・駅と道・学び舎など地元に着着した二〇章立てである。今回、電子書籍とした理由はいくつかある。①

① キレイな写真を閲覧できる。紙印刷より高精度で表示できる。②劣化がない。紙印刷の場合、劣化は免れないが、デジタルだと劣化がない。③低コストである。紙の印刷費用は不要で、USBを必要に応じて仕入れればよいので、無駄（在庫リスク）がない。④制作に手間がかからない。紙印刷の場合、入稿前に何度も修正をおこなうため、手間がかかるが、デジタルの場合は、簡単に修正できる。デメリットとして、技術が陳腐化し、電子書籍が稼働しなくなる可能性があることである。



▲電子書籍 写真に解説付き。

## トライやる・ウィークと史料館

——本庄中学校の生徒を受け入れて——

史料館研究員 水口千里

二〇一一年のトライやるウィークでは六月九日、十日の二日間、本庄中学校の二年生を受け入れた。今回は、山田琉加さんと中南賢治さんの二人が参加した。山田さんは、放送部に所属しアナウンス技術を磨いている。趣味は読書だそう。小学校三年生の時に、団体見学で史料館を見学したのを覚えていて、その時のレトロな印象が好きで、事業所

として選んだそうである。中南さんは、特殊技術部に属していて普段はパソコンなどを扱っているそうである。昨今の博物館の作業では、パソコンは欠かせないので、技術を生かせる場面もありそうだ。またボーイスカウトの活動などで深江会館を使用することもたびたびあ



▲所蔵資料から好きなものを選んで展示した中南君と山田さんの「夏の風物詩」

り、その感謝の気持ちをかめて臨みたいとのことだった。

一日目午前中は、史料館内の展示資料をみて、資料の種類や使用方法を理解してもらった。またDVDを用いて民俗資料の整理の基礎について学習してもらった。午後からは、目録作成の下準備で市民グラフの『神戸』の整理の体験をもらった。

二日目は前日の感想を話し合った後、展示の体験をってもらうことになった。史料館には、季節の展示コーナーがあるので、それまで展示してあった五月人形の片付けから始めた。史料館の五月人形はかなり老朽化しているので二人ともかなり気を使って細心に取り扱ってくれた。今回の展示テーマは「夏の風物詩」である。手回しのカキ氷機、氷嚢、虫取り籠、夏用飯櫃など収蔵資料から好きなものを選んで、自由な発想で展示し、二人の「夏の風物詩」を作った。そのあとは、市民グラフの目録をエクセルで完成させ、「史料館だより」を封筒詰めして郵送する準備をした。山田さんは、封筒詰めのような事務的な作業が楽しかったそうである。

二日間の体験を終え、最後に二人の感想文を紹介したい。山田さんは「私がかっこいいなと思ったのが、二眼レフカ



▲『生活文化史』を郵送するため封筒詰め作業にも熱心に取り組んだ



▲小学校の前で銃を構える兵士。戦争は学校生活にも影を落とした。

### 本庄小学校歴史写真展の開催

メラで、(中略)二日目は、いっぱい写真を撮りました。私はほとんど初めてカメラを使ったのでとてもいい経験になりました(後略)」と特にカメラに興味を持ったようである。

中南さんは「これまでの史料館のイメージはいろいろなものが置いてあるだけといったイメージがあつたけれど、今回のトライヤルで展示してあるものの貴重さが良く分かったので、いろいろな資料をについてくわしく教えてもらったり、季節のコーナーの配置をきめたり、古い書物を読んだり、貴重な経験ができてよかったです。将来はわからないけど、こういう専門的な仕事を知ることができてよかったです。(二部編集)」

二人のこれからの活躍を館員一同願っている。

平成二十三年十一月二十六、二十七日の両日(土、日)の二日間にわたって、深江南町三丁目の深江南地域福祉センター二階で本庄小学校の歴史写真展を開催した。主催は深江塾、協力協賛として本庄小学校と深江生活文化史料館及び深江南ふれあいのまちづくり協議会。

写真展は、地域の人たちに伝統ある本庄小学校



▲昭和36年、学校上空から海岸を望む。砂浜が広がっている  
(いずれも森口健一氏収集)

の歴史を知ってもらい、学校を好きになると同時に誇りを持つってもらうこと、さらに深江塾の活動やその意義を知ってもらうことを目的に開催。展示物の数は写真及び昭和三十年代の昭和風物詩のイラストなどおよそ五十点。写真は本庄小学校の協力を得て、アルバム約四十冊、写真数百点を借り、神戸深江生活文化史料館の支援と助言を得て説明文を作成した。

二日間の見学者は約百名。深江塾のメンバーは来場者に対する解説を行うとともに、感想を聞き取りした。感想では「解説文が簡潔でよく分かった」「資料の数と内容から調査の努力がうかがえる」「期間はもっと長くかつ定期的に実施すべき」など好感を持った感想がほとんどだった。また「卒業生への広報に力を入れるべき」「地域への広報が不足」「場所は深江会館にしたらどうか」などの提案も頂いた。同時に会場に簡素な花などを置いて細やかな配慮をしたことも好評をよんだ。

(深江塾 森口健一)

史料館日誌抄

史料館副館長

道谷 卓

二〇一一年四月以降

△二〇一一年▽

5月29日 甲南大学文学部

(見学者 三二名)

6月9日 トライヤル・ウィーク・本庄中学校二年生二名を受け

10日 入れ、二日間史料館業務の体験

7月9日 神戸新聞文化センター

(見学者 三〇名)

7月15日 東灘区役所職員研修

(見学者 一六名)

10月14日 六甲小学校 三年生

(見学者 六九名)

10月16日 深江あそ歩まち歩き①

(参加者 一三名)

10月22日 深江あそ歩まち歩き②

(参加者 五名)

10月30日 深江あそ歩まち歩き③

(参加者 一三名)

11月26日 深江塾「本庄小学校写真展」

(パネル作成協力)

27日

12月11日 史料館創設30周年記念のつどい

(参加者 五二名)

△二〇一二年▽

1月16日 六甲アイランド小学校 三年生

(見学者 九一名)

1月19日 稗田小学校 三年生

(見学者 八九名)

1月20日 本山南小学校 三年生

(見学者 五四名)

1月23日 福池小学校 三年生

(見学者 一六一名)

1月24日 本山第三小学校 三年生

(見学者 一四八名)

1月24日 本山第一小学校 三年生

(見学者 七二名)

1月26日 西灘小学校 三年生

(見学者 六二名)

1月27日 本山第一小学校 三年生

(見学者 七九名)

1月27日 本山南小学校 三年生

(見学者 七五名)

1月30日 魚崎小学校 三年生

(見学者 二六四名)

1月30日 東灘小学校 三年生

(見学者 一八四名)

資料寄贈者ご芳名

(敬称略・二〇一一年分)

富永喜代子／橋本慶子／松原浩二／森田工(藤川祐作記)

編集後記

昨年史料館30周年を記念して、これまでに集めた写真を電子書籍として発刊しました。USBメモリ形式で販売(七〇〇円)もしています。本号の「生活文化史」でも紹介しましたが、深江塾のみ皆さんの協力で珍しい戦前の深江駅の写真なども集まりました。引き続き収集していきますので、古い写真をお持ちの方は史料館まで一報いただければ幸いです。(大國)

『生活文化史』第40号 2012・3・31

編集／大國正美

発行／神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-15-17

☎ 078-45314980 (FAX兼用)

<http://homepage2.nifty.com/fukake-museum/>